

スクラム

～ 立志・挑戦・感動～

浮羽中学校学校通信

第26号（10月1日発行）

文責 校長 高倉 満

「ありがとう」は奇跡の言葉 「感謝」から「幸福」へ

ありがとうは「奇跡の言葉」である。口に出せば、元気が出る。耳に入れば、勇気がわく。「ありがとう」と言えないとき、人の成長は止まっている。成長しているとき、人は他人のすごさが見えるからだ。成長が止まると、人の欠点ばかりが目につくからだ。家庭でも、「こうあってほしい」「こうあるべきだ」と、自分の思い通りの妻や夫、子どもに変えようとしなくて、まず「ありがとう」と言ってみよう。ある主婦は晩年、病んで、家族の名前さえ思い出せなくなった。しかし、医師が「人生で一番幸せだったのはいつ？」と聞くと、はっきり答えた。「娘が産まれた時です・・・うれしかった！」それを聞いた娘さんの目から、涙がどっとほとぼしった。「ありがとう、お母さん。その一言で十分です」そして自分の子どもを、いつも叱っていたことを反省した。「そうだ。この子が産まれたとき、産まれてくれたことだけで私は幸せだった」それなのに、いつか、自分の中の「理想の子ども」に、この子を合わせようとしていた。百点の理想像と比べての減点主義。いつも「ここが足りない。あれが、もうちょっと」「どうしてこんなことができないの」そんなお母さんだったのに、子どもは一生懸命応えようとしてくれた。優しくしてくれた。ありがとう。本当にあなたが生きていてくれるだけで、お母さんは幸せ。あなたはそこにいて、お母さんを幸せにしてくれる。ありがとう。彼女は、新しい目で子どもを見た。すると「ありがとう」「うれしい」の材料はこと欠かなかった。朝、ぎりぎりだけ起こせば起きる。それが実は「すごいこと」なんだと感動した。ご飯も好き嫌いはあるけど、成績も良いとは言えないけれど、「今日も、学校に行ってくれて ありがとう」「今日も笑顔を、ありがとう」何もなくても「いつも、ありがとう」「無事の日」にありがとう。「当たり前」を「当たり前」と思う心は傲慢（ごうまん）だと気がついたのである。病を宣告されてはじめて、今までの健康を「当たり前」と思い、少しでも感謝していなかったことに気づいた人もいる。だから、たまには、しっかりと目を見て「お父さん、いつもありがとう」と言ってみよう。お父さんも黙って食べていないで、お母さんに「いつも、ありがとう」と言ってみよう。照れくさくても言ってみれば、そこから何かが変わっていく。

□ 昨年も出した内容ですが、改めてみんなに伝えたいと思い今年も書きました。私はこの文章を読んで、自分をふり返ってみました。89歳になる父は痴ほうが進んで、昔のように体も動かなくなっています。でも気持ちはあり「何か家族のために」という思いがあるのでしょう。昼から風呂を洗い、油断すると3時にはお湯がたまる。お湯ならいいのですが、入れていることを忘れて、気づいた時はぬるま湯になってこともあります。この状況は昨年より回数が多くなりました。また重いゴミ袋を曜日を間違えて出す、夜と朝を間違えて深夜に玄関の電気をつけてカギを開けるなど。「またかとイラッとする。」こともありますが、怒らずに「ありがとう」と言うように心がけています。みんなも家族に対して素直に「ありがとう」を言いましょ。学校、部活、塾への送迎、掃除や洗濯、食事の準備等、家族や身近な人に感謝をして過ごしてください。もちろん学校生活で、あなたを支えてくれる友達、先生にも「ありがとう」を忘れないように。

